

# 現代社会における集団形成の規範的条件

## —「異質的なコミュニティ・ビロング」の確立論—

Normative condition for group formation in modern society

—Theory for establishing "heterogeneous community belonging"—

竹元 秀樹 Hideki Takemoto

(現代マネジメント学部)

### 抄 録

世界の民主的な先進諸国では、近代社会が形成される過程において、「個人主義化」と「情報社会化」が絶えることなく一貫して進行してきた。その結果、個人の立ち位置は、不安定な状況におちいつている。その大きな原因の一つとしてあげられるのが、「中間集団」の衰退である。「中間集団」が本来の機能を果たせられなくなり、個人と「中間集団」との帰属関係が希薄化して、個人の不安定な状況を招いた。この状況を改善するための方向性として、「個人主義の再構築とそれを基盤にした集団化・ネットワーク化」が設定できる。本稿は、この方向性を実現するためにはどのように進めていけば良いか、その方法論を模索するものである。

そのために、4人の社会心理学者および社会学者——エーリッヒ・フロム、デイビッド・リースマン、ウルリッヒ・ベック、アンソニー・ギデンズの大衆社会論や現代社会論に依拠して、個人を確立するための方法論を展開する。それは〈本来あるべき姿の個人主義〉を個人が身につけることを意味するが、それを前提にして、つぎはどのようにして集団化・ネットワーク化を進めていけば良いか、その方法を模索する。

個人の確立と集団の秩序の構築という、対立する価値観を統合（止揚）して成立する、現代社会におけるあるべき集団形成の条件とは、いったい何か。それは、これまで一般化されて語られてきた概念である「同質的なコミュニティ・ビロング」から脱却して、「異質的なコミュニティ・ビロング」を実現することに収斂されるのである。

### キーワード

中間集団 (intermediate group)      脱埋め込み／再埋め込み (dis-embedding／re-embedding)  
異質的なコミュニティ・ビロング (heterogeneous community belonging)

### 目 次

- 1 帰属関係のゆらぎの問題
- 2 ベックとギデンズの現代社会論
- 3 社会変容の実態
- 4 個人の再構築
- 5 集団化に向けて
- 6 結語

## 1 帰属関係のゆらぎの問題

私たちが、社会において安定していると感じるのは、どのような状況のときであろうか。あるいは、安定していることを意識することなく過ごしている

ときは、どういうときであろうか。それは、社会とつながっているときである。すなわち、社会の一員として、自分の役割や立場を理にかなった内容で説明できるときである。それでは、その説明可能性は

何によって得られるのか。それは、人びとが「中間集団」に所属することにより、全体社会とつながっている関係性を構築できているかどうかにかかっている。

多くの人が所属する「中間集団」が「学校」であり「会社」である。もちろん、それ以外の「中間集団」に、人びとはその目的や動機に応じて所属している。たとえば、地域集団としては、自治会・町内会・婦人会など。自発的組織としては、ボランティア組織、スポーツや趣味などの集まり、商工会や同業者組合など。自営業者の人たちも、町内会や商工会・同業者組合に所属して地域社会で安定性を得ている。

「中間集団」は他人との交流の場である。ここが家族とは大いに違うところで、家族は親密圏を形成しているが、「中間集団」は社会圏を形成している。「中間集団」は、社会性を身につけることが要求されている場所であり、そこで自分の存在を確立することによって、孤立せずに社会での安定性を得ているのである。

1990年代に入ると、バブル経済が崩壊して、経済の安定成長に終止符が打たれる。当時の日本社会を支えていたのは、経済が成長することを前提につくられた社会モデルであるが、これを「成長型社会モデル」と呼ぶことにする。その代表的な仕組みとして「福祉国家」や「日本的経営モデル」があるが、経済の成長がとまると、「福祉国家」はそれを支える財政基盤が、「日本的経営モデル」はそれを支える企業収益が脆弱になり、うまく機能しなくなる。そうすると、地域集団や学校を含む地域社会における社会インフラの弱体化、会社によるリストラ（整理解雇）の横行や非正規雇用の拡大などの社会問題が進行した。

それに伴い、当然のごとく、「中間集団」と個人の関係にも変化が生じて、「中間集団」が個人を守ってくれるという機能が徐々に低下した。個人と「中間集団」との信頼関係が崩れつつあり、両者の帰属関係がゆらいでいるのである。最後の砦となる家族についても、核家族内での個別化が進み、家族間の関係が希薄化していくことなどから、同様の「帰属関係のゆらぎの問題」が指摘され、親密圏と社会圏の両方で露呈する。

私たちは、社会という大海原に、自分の櫂のみで船をこぎだしていかなければいけないのであろうか。ときにおそってくる荒波に飲み込まれないように、

自分の力のみで立ち向かっていかなければならないのであろうか。しかし、それではリスクがありすぎる。本稿は、そのような問題意識のもとに、個人の帰属状況がゆらぐ現代社会において、個人の安定性を担保する集団化あるいはネットワーク化をどのように進めていけばよいか、その方法論を展開するものである。

## 2 ベックとギデンズの現代社会論

### 2.1 二つの近代化

ウルリッヒ・ベックとアンソニー・ギデンズは、現代人が自力のみで立ち向かわざるを得ない傾向におちいつている状況について、近代化がどのように進んできたかという視点から明らかにしている。これらの「再帰的近代化」という現代社会論（Beck 1986=1998; Giddens 1990=1993, 1991=2005; Beck et al. 1994=1997）に依拠して、前述の「帰属関係のゆらぎの問題」について考察を深めていきたい。ベックは、近代化が「単純な近代化」から「再帰的近代化」へと、二つの段階をへて進んできたことを主張する。

18世紀から19世紀にかけての西欧では、産業革命や市民革命などの社会変革をへて、近代社会が誕生した。それでは、いったい何を近代化したのだろうか。それは、西欧の中世期に存立した、封建的で伝統的な社会制度や価値観、そして自然である。近代化の結果、家族の形は大家族から近代家族（核家族）へと変容していく。全体社会のレベルでみれば、絶対主義国家が崩壊し国民国家さらに福祉国家が誕生する。そして、人びとの帰属先は、封建的な身分制度から階級・階層へと変化する。地域社会においては、村落共同体が解体して、市民意識を基盤にした近代的な地域社会が形成されていく。労働形態は家内労働から雇用労働へ移行するなど、政治・経済・文化・社会のさまざまな領域で変容が生じた。近代化によって、新しく誕生した制度や集団、そして価値観が定着することにより、近代社会は形成されていく。この段階での近代化を、ベックは「単純な近代化」あるいは「第一の近代」と呼ぶ。

しかし、「単純な近代化」によって誕生した近代社会も、そのまま存続するというわけにはいかない。勤勉で禁欲的な「産業社会」から快楽的で欲望的な「消費社会」へ移行するにつれ、社会も変容する。

ベックは、一つの時代が終焉を迎えた時期として 1989 年をあげるが、それは「ベルリンの壁」が崩壊した年である。この年を境にして、ソビエト連邦をはじめとする東欧の共産（社会）主義国家がつぎつぎと崩壊した。東西冷戦は、西側の勝利で結末を迎えたのである。ベックは、「資本主義の危機ではなく、資本主義の勝利こそが、まさに新たな社会形態を生みだしているのである」（Beck et al. 1994=1997: 12）と述べている。この東西冷戦の終焉の時期が、「単純な近代化」によって誕生した社会から「再帰的近代化」へとさらに変容した転換点であることを、ベックは匂わす。ただ、1989 年周辺で沸騰点にいったと考えるべきで、この時期以前から「再帰的近代化」による社会変容が底深く徐々に進行していたといえる。

日本の場合、「再帰的近代化」へと変容が進み始めた時期はいつごろであろうか。筆者は、日本の戦後を経済成長の推移を基軸にして、戦後 10 年経った 1995 年から第一次オイルショックが発生した 1973 年までの時期を「高度成長期」、それ以降バブル経済が崩壊した 1991 年までを「疑似成長期」、それ以降現在までを「停滞（不安定）期」という三つの時期に分けて、各時期の実相の明確化を試みたが（竹元 2021）、そのなかで「疑似成長期」が、その時期に相応すると説明できる。それは、「疑似成長期」に「産業社会」から「消費社会」への変容が始動して、その流れが徐々に強まっていった時期だからである。

「疑似成長期」は二つの顔をもっているが、一つは「高度成長期」の延長線上にあって、その社会の流れが残存することによって見せる顔である。もう一つは、「停滞（不安定）期」の前段階にあって、「停滞（不安定）期」に本流となる社会の流れが、「疑似成長期」に始動したことによって見せる顔である。「疑似成長期」は、「高度成長期」に形成された「単純な近代化」が残存して徐々にその流れが弱まっていった。一方で「再帰的近代化」が始動してその流れが徐々に強まっていき、「停滞（不安定）期」には本流となる。ベックが指摘する 1989 年周辺は、「疑似成長期」と「停滞（不安定）期」の端境期に相当するが、すなわち日本の場合もこの時期に「単純な近代社会」から「再帰的近代社会」へ転換する沸騰点を迎えた、と説明できるのである。

## 2.2 「再帰的近代化」とは何か

「単純な近代化」は、封建的で伝統的な社会制度や

価値観、そして自然を近代化したと前述したが、「再帰的近代化」はいったい何を近代化したのだろうか。結論を先取りしていうと、「再帰的近代化」は「単純な近代化」によって誕生した近代社会を近代化したのである。いいかえると、近代化は第一段階として新しい社会＝近代社会をうみだし、第二段階としてさらに近代化を進めて、第一段階でうみだした近代社会をみずから手で変容させていった。ベックが、「単純な近代化」を「第一の近代」、「再帰的近代化」を「第二の近代」と呼ぶ理由がここにある。日本では前節で示した通り、「疑似成長期」を移行（交替）期として、第二段階の変容が徐々に進んでいったということになる。

この第二段階への社会変容については、つぎのような論調があった。近代化が進んで年数が経過すると、第一段階で生みだされた近代社会の性格や特性では、説明できない社会現象が起きてきた。この現象をとらえるには、新しい理論が必要である。そこで、社会学の分野では、「再帰的近代化」の理論が注目を浴びるのである。

そもそも 1970 年代以降、「ポストモダニズム（post-modernism）」という、現代社会を新しくとらえる思想や動きが登場して、当時の思想文化を代表するキーワードとなった<sup>(1)</sup>。「ポストモダン」とは、現在私たちが生きている時代を、近代が終わった「あとの（post）」時代であると位置づける考え方である。ただ、ここで注意しなければならないのは、「再帰的近代化」は、「ポストモダニズム」論が主張したように、近代が終わったあとに新しい社会が誕生するとはしていないことである。あくまでも、第一段階の「単純な近代化」によって誕生した近代社会を、「再帰的近代化」が第二段階として、さらに近代化を進めて変容させていることを主張する。第一段階と第二段階の間は連続しており、近代化はたえまなく進んでいる。この変容の仕方を、「再帰的」という言葉を使って主張するのである。

ベックは、「産業社会の延長としての近代化は終わり、産業社会の前提そのものを変化させる近代化が推し進められている」（Beck 1986=1998: 10）と述べている。近代化の徹底化が進んだということであるが、それはベックが、「再帰的近代化」のことを「自己内省的な近代化」とも呼んでいることにもつながる。「内省」とは、深く自己をかえりみることである。「再帰的近代化」とは、「近代化によって生みだされた結果をかえりみて、その修正の方向性を社会の内



面に取り込み、社会の特性を変えていくことである」とも説明できる。

近代社会は、近代化によって新しい科学技術を開発して、また新しい社会の仕組みを導入して、みずからを変えてきた。それにより、豊かで便利な世の中が実現したが、一方で色々な問題もかかえることになった。すなわち、自分でしたことが自分に返ってくるという状況が、現代において発生しているのであるが、再帰的な動きとは、このような一連のつながりによって成り立っている。しかし、このような状況を放置しておいたのでは、世の中は悪くなる一方である。近代化によって発生した問題を克服する道をみいださなくてはならないが、「再帰的近代化」の理論は、そういう時代に私たちが身をおいていることを提示しているのである。

### 3 社会変容の実態

#### 3.1 「リスク社会」の到来

ベックは、「再帰的近代化」によって起きた社会変容について言及しているが、そのなかから代表的なものを二つ取りあげて説明したい。それは、「リスク社会」と「個人化」である。

「産業（工業）社会」は、さまざまな技術を開発して生活の利便性を向上させてきた。私たちが生活するうえで困っていることを、技術革新によって解決してきたが、それは科学の発展の結果である。しかし皮肉なもので、その解決策自体が今度は新しい問題を引き起こすようになる。前章で述べた通り、再帰的な動きが発生しているのだが、ベックはこのような動きの象徴的な事例として、1986年にチェルノブイリの原子力発電所で起きた爆発事故を取り上げている。チェルノブイリは、ウクライナの北部にある都市であるが、この事故により欧州の広範囲にわたり放射能汚染が観測された。ベックは、「原子力発電所は人類の生産能力と創造力の頂点に位置する」（Beck 1986=1998: 3）といているが、この「近代化の最高段階における産物」が全世界を不安の底におとし入れたのである。

このように、現代人はいつ訪れてくるか分からない危険にさらされているわけだが、その危険は国とか地域とかなどの境界線を乗り越えて襲ってくる。人間はみずからつくった最高段階の産物によって、リスクにさらされる社会に身をおいているのである。

近代化とともに発展した科学の力は、最終的には人間が制御できない作品を作りだした。何でも支配できる、何でも制御できるという人間の自信は、みずからがつくりだしたモノが生みだすリスクによって打ち碎かれる。すなわち、それは過信でしかなかったのである。

そして、このリスクは一部の人間が負うものではない。「単純な近代化」では、リスクは社会の弱者へ不平等に押しつけられてきた。危険な状況が発生すると、富裕者や権力者はその場所からのがれたり、対策を講じたりすることができるが、貧困者など危険な場所からのがれたくてものがれられない人たちは、その場所に居続けるしかない。ところが、人間自身が制御できない危険を生みだした社会では、富裕者や権力者、貧困者などに関係なく、誰でもその危険にさらされるようになる。それが、「リスク社会」である。

そして、「リスク社会」で明らかになった問題は、原発事故による放射能汚染だけではない。気候変動や環境破壊による災害の発生、グローバル化した金融市場の破綻、テロによる脅威、過剰な軍備拡大に対する不安など、さまざまな領域に広がっていく。一定の範囲におさまりきらない、いつ襲ってくるか分からないリスクに、誰もが現在さらされているのである。

#### 3.2 「個人化」の進行

このようなリスクは、社会的な問題に限る話ではない。私たち個人の生活や人生にもかかわってくる問題でもある。それを、ベックは「個人化」という言葉をつかって説明する。

「単純な近代化」が進むことにより、人間は封建的で伝統的な集団から解放され、個人の自由を手に入れた。しかし、集団から解放されただけだとさまようばかりで、非常に不安定な状況におちいる。そこで近代社会は新しい制度や集団を生みだし、そこに人びとは帰属することにより、安定した生活を維持することができるようになった。ただ、そのような新しく生みだされた仕組みを、近代社会は近代化を進めるとともに変容させてきた。その結果、さまざまな問題が生まれ、うまく機能しなくなり、前述したとおり「リスク社会」を迎えることになった。

いわゆる、「再帰的近代化」の到来である。ベックは、個人が階級・職場・家族などの集団から切り離されて解放されていく過程を「個人化」と呼んでい

る（浜 2007: 72）。「再帰的近代化」の時代では、「単純な近代化」によって新しく生みだされた階級・階層、会社、地域社会などの「中間集団」や近代家族から、人びとは切り離されつつあるのである（Beck 1986=1998: 135-309; Beck et al. 1994=1997: 20-1）。

個人と社会をつなぐ「中間集団」との帰属関係が希薄になり、個人は社会にむき出しになる。何かあったときは、「中間集団」や家族が個人を守ってくれたが、それを期待することは難しくなる。極端に言えば、人びとは、自分の力のみで「リスク社会」に立ち向かわなくては行けないというリスクにさらされているのである。そこでは、選択の幅が広がった現代社会で、自分の判断でどれを選ぶか決めて、道を切り開いていくことが要請されるが、そのためにもその判断基準となる価値観を、日ごろから鍛えることが大切である。いつも他人の価値観に合わせて周囲に流されているようでは、「リスク社会」の荒波に飲み込まれるだけなのである。

### 3.3 「脱埋め込み」と「再埋め込み」

「再帰的近代化」によって明らかになった社会変容の具体的な現象として、ベックの「リスク社会」と「個人化」をみてきた。ベックと同様に、「再帰的近代化」論を唱えるアンソニー・ギデンズが主張している論点にも耳を傾けてみたい。ギデンズは「再帰的近代化」論のなかで多くの論点を提示しているが、そのなかから「帰属関係のゆらぎの問題」について考察するうえで、大変参考になる「脱埋め込み／再埋め込み」という考え方を取りあげてみたい（Giddens 1990=1993, 1991=2005; Beck et al. 1994=1997: 105-204）。

近代化にともなう「脱埋め込み」から「再埋め込み」への動きは、二つの段階で説明できる。第一段階は、「単純な近代化」によって、人びとが伝統的で封建的な制度や集団に埋め込まれた状態から脱け出し、新しく生まれた近代的な制度や集団に再度埋め込まれていき、安定した生活を確保した動きである。これが、「単純な近代化」による「脱埋め込み」から「再埋め込み」への動きである。

ただ、この動きは、近代化がさらに進むことによりふたたび生じる。それは、第二段階として「再帰的近代化」によって発生した動きであるが<sup>②</sup>、さらなる近代化は、前節で述べたとおり、近代社会がみずから生みだした新しい制度や集団から、人びとが脱け出すことをうながす状況を作りだす。それは、

本人が望む、望まないに関係なく、会社や地域社会などの「中間集団」や家族からの離脱が進む。「中間集団」や家族との関係が希薄になり、「帰属関係のゆらぎの問題」が発生するが、このようにして第二段階における「脱埋め込み」の状況が進展するのである。

しかし、このような「脱埋め込み」の動きが進展するのみでは、人びとは不安定な状況に追い込まれる。それでは、人びとを安定させるための「再埋め込み」の動きは、現在の社会で起きているのであろうか。

### 3.4 「象徴的通票」と「専門家システム」

ギデンズは、この「脱埋め込み」から「再埋め込み」への動きについて、「社会関係を相互行為のローカルな脈絡から『引き離し』、時空間の無限の拡がりのなかに再構築すること」（Giddens 1990=1993: 35-6）と説明する。人びとは、ローカル（地域的・局所的）な狭い範囲で、人と人との相互行為を行っていた。そこでは、基本的には、人と人が対面して相互行為を行っていたが、近代化の進展とともに、そのような社会関係から、人びとは引き離されていく（脱埋め込み）。そして、時間・空間を越えた広い範囲のなかで、人びとは相手がどのような個人なのか、あるいはどのような集団なのか、その特性に関係なく、相互行為を行う社会に埋め込まれていく（再埋め込み）。ギデンズは、グローバリゼーションの動きを視野に入れて説明している。

このような「脱埋め込み」から「再埋め込み」への動きをうながしてきた、あるいはこれからもうながしていくメカニズムとして、ギデンズは「象徴的通票 symbolic token」と「専門家システム」をあげて、これらをあわせて「抽象的システム」と呼ぶ。（Giddens 1990=1993: 35-44, 1991=2005: 20）。

近代社会は、時間・空間を越えて人びとが相互行為を行えるようにしてきたが、そこでは、人と人は対面していないため、相互行為ができるようになるには何かが必要である。その何かとは、人と人を結びつける媒体（メディア）のことであるが、この媒体のことをギデンズは「象徴的通票」と呼ぶ。その代表的なものとして「貨幣」をあげているが、たしかに近代社会を迎えて貨幣経済が発展・成熟したことにより、私たちは時間・空間を越えて、モノやサービスのやり取りができるようになった。

貨幣以外で、近代社会を迎えて、人と人を結びつ

ける媒体として確立したものをあげるとすれば、郵便・電話、テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、鉄道・航空機など、数多くあげることができる。2000年代に入ると「情報社会化」が進展して、携帯電話やインターネットが普及した。最近では、Facebook・Twitter・LINE・InstagramなどのSNSの存在を抜きにして語ることはいできない。新しい媒体の創造により、ギデンズのいう「脱埋め込み」から「再埋め込み」への流れが形成されてきた。

つぎに、「専門家システム」についてみてみたい。近代社会は工業化を進めてきたが、そこでは数多くの技術革新が行われ、その技術的な専門知識に支えられ、現在の便利で安全な日常生活は成り立っている。「専門家システム」とは、このように科学者や技術者はもちろん、それに限らず医者や弁護士や建築家などの専門家の知識によって、体系的に作り上げられた仕組みのことである。

しかし、その専門的な知識を、人びとはほとんど理解していないのに、不安に思わず普通に日常生活を送れているのはなぜだろうか。それは、「専門家システム」を信頼しているからである。たとえば、電車や航空機について、機械的な装置などの技術的な専門知識に熟知している人は、一般の人のなかではほとんどいない。だからといって、事故が起こるかもしれないからこわくて乗れないでは、日常生活は送れない。安全性を考慮した技術的な専門知識にもとづいて運営されているので事故は起きない、と信頼しているから利用できるのである。

こうすることによって、いまいるローカルな場所から脱け出し（脱埋め込み）、広い範囲へ移動して、そこで新しい社会関係を構築できる（再埋め込み）。しかし、この「専門家システム」の信頼性も、ベックが指摘するチェルノブイリの原発事故などによりゆらぎつつある。だからこそ、「リスク社会」を迎えているのである。

### 3.5 「再埋め込み」のない状況の進展

「象徴的通票」の創造と「専門家システム」の確立を前提とする「脱埋め込み」と「再埋め込み」の考え方は、近代化による社会変容を把握するうえで、非常に示唆に富んだ内容になっている。

グローバリゼーションは、これからも進んでいく。また、AI、5G、VRなどの技術革新により、IoTや自動走行、ドローン、ロボットなどが、私たちの日常生活のなかに浸透していくであろう。これらの社

会の流れから、ギデンズが主張する「社会関係を相互行為のローカルな脈絡から引き離し、時空間の無限の拡がりのなかに再構築する」という、「脱埋め込み」と「再埋め込み」の動きが、これからも進んでいくことは間違いない。

近代化にともなう「脱埋め込み」から「再埋め込み」への動きについては、これまで説明してきたとおり、「単純な近代化」では「脱埋め込み」と「再埋め込み」が同時に実現して、人びとは安定した生活を確保した。そして、現在私たちが身をおいている「再帰的近代化」の社会では、さらなる近代化によって「脱埋め込み」が進んできたが、問題はその後の「再埋め込み」が進んでいるかどうかである。進んでいるとすれば、どのような形で進んでいるか。すなわち、注視しなければいけないのは、その「再埋め込み」が人びとを安定した状況へ導いてくれているのか、ということである。

「再帰的近代化」における「個人化」は、何らかの集団に「再埋め込み」されることのない解放者であることを、ベックは唱えていることが理解できる（伊藤 2017: 81）。すなわち、「再埋め込み」のない状況が進展するのであるが、そうすると個人を守ってくれていた「中間集団」との関係は希薄になり、人びとは社会にむき出しになり、リスクは直接個人に降りかかってくることになる。このままでは、決して安定した生活を確保することはできない。確保するためには、リスクに負けない強い自分を作らなければいけないが、社会的弱者にかぎらずすべての人がそれを実現できるわけではない。

一方、ギデンズは、「再埋め込み」は、時空間の無限の拡がりのなかに再構築することと説明している。この説明からは、ベックと同様に、何らかの集団に「再埋め込み」されることを想定しているとは思えない。たとえば、グローバリゼーションにより拡大するネットワーク、またインターネットを通じてのネットワークなど、集団というよりはネットワークに個人が組み込まれることによって、「再埋め込み」が進んでいくというイメージが浮かぶ。

ギデンズも、ベックがいう「再埋め込み」のない状況が進展することを、つぎの内容で同様に主張している。「単純な近代化」では、人びとは新しく生まれた「中間集団」に組み込まれていった。そして、その一員として、自分が何者であるかを語ることができた。自分の家族の話や会社の話をするによって、自分が存在する意味（アイデンティティ）を



説明できたのである。個人と家族や会社との帰属関係が安定していたからこそ、このような状況が生まれていたのかもしれない。

ところが、「再帰的近代化」が進むと、個人と「中間集団」との関係が希薄になるが、そうすると、家族や会社の話をする意欲や機会は減退する。人びとは何らかの集団の一員として、自分を語る機会を失うのである。とすれば、私たちは、何をもって自分を語れるのだろうか。それは、これまで生きてきた自分の生活史＝自分史や、現在の自分の状況をもって語るしかない。自分が何者であるか、自分が存在している意義はいったい何なのか。その問いに答えるために、私たちは内省的に自分をかえりみて、他人に堂々と言えるように自分史を作りかえていくしかないことを、ギデンズは主張するのである（Giddens 1991=2005; 浜 2007: 69-73）。

現在多くの人が、SNSを通じて、自分を語っている。家族や会社の同僚など身近な人たちに、自分を語れないとなると、誰に語れば良いのだろうか。今や、SNS という、まさしくその要望に応じてくれる媒体が存在する。自分のことを語りたい（自己顕示）という背景には、他人に認められたい（他者承認）という欲求がある。他人に認められて初めて満足できて、自分の存在している意味を確認できるのである。現実の世界で充実（リア充）している自分を、非現実な世界であるインターネットの空間を通じて語るわけだが、相手がどのような人物なのか、とくに特定することもなく語りかける。一人でも多くの人に承認してもらうには、こんな好都合の媒体はない。時空間の無限の拡がりのなかに社会関係を再構築するという、ギデンズの主張につながる動きである。

自己というものは、集団の一員として形成されるのではなく、個々人が自分自身をかえりみることによって形成されていくことをギデンズは主張するのだが、ベックと同様、何らかの集団に「再埋め込み」されることにより、人びとが安定を取り戻すことを想定していない。ベックがいう「再埋め込み」のない状況が進むことを、裏書きしているのである。

## 4 個人の再構築

### 4.1 戦後の日本における「再埋め込み」

「再埋め込み」のない状況は、現在の日本でも進ん

でいるのだろうか。戦後の日本を振り返ることにより確認してみたい。

戦後の日本で、まず「脱埋め込み」と「再埋め込み」の動きが顕著にあらわれたのは、高度経済成長を実現するために進められた工業社会化の過程においてであった。当時、国家主導による工業開発計画が実施されるが、この計画は「東洋の奇跡」と呼ばれるほどに成功を収め、日本は戦後からの復興を成しとげる。その背景では、農業従業者から賃金労働者への職業移動と、それにとまなう都市部への人口移動という大規模な社会移動が発生した。

農業部門（第一次産業）からの「脱埋め込み」、そして工業部門（第二次産業）への「再埋め込み」を進めることにより、戦後の日本社会の改造計画は成功を収めた。国民の所得の増加により、中流階級が増え収入面で安定した生活を送れるようになる。また、「高度成長期」を通しての近代化によって生まれた制度や「中間集団」に人びとは組み込まれ、その一員として、社会との関係においても安定性を確保した。高度経済成長は、「脱埋め込み」から「再埋め込み」への動きが、見事に実現したことから成しとげられたといえるが、これはベックとギデンズがいう「単純な近代化」によって起きた社会変容に相当するものである。

その後、高度経済成長が終わりを迎え、本稿でいう「疑似成長期」に入ると、徐々に個人と「中間集団」との関係が希薄になり始めるが、その流れが「停滞（不安定）期」に入ると本格化する。この動きは、「再帰的近代化」が「疑似成長期」において始動して、「停滞（不安定）期」に本格化したといいかえることができるが、いわゆる「脱埋め込み」のみが進み「再埋め込み」のない状況が着実に進んだのである。

ここでは、「高度成長期」のように、国家主導により「再埋め込み」先が手当されることはなかった。第一次産業から第二次産業への移行時には、国土復興という旗印のもとで工業社会化へ対応することにより国も手当てすることができたが、第二次産業から第三次産業への移行時、すなわち情報社会化への移行時においては手当てできる術をもっていなかった。

また、「単純な近代化」の社会では、人びとが安定を確保できる新しい制度や「中間集団」が生まれたが、「再帰的近代化」の社会では同様の動きを見出すことはできない。いわゆる「モデルなき時代」に、私たちはいま身をおいて、新しい社会モデルを

構築できていない状況が延々と続いてきているのである。

このように振り返ってみると、「再埋め込み」のない状況が、現在の日本社会でも着実に進んできたといえ、これから間違いなく進展していく。ベックやギデنزが唱える「リスク社会」「個人化」や「脱埋め込み／再埋め込み」の考え方は、社会全体のこれからの基本的な流れを長期的視点で推測するうえで、的を射た主張であるといえる。

「再埋め込み」のない状況がこれからも進んでいくことに対して、かれらは警鐘を鳴らしているとの認識に私たちは立つべきであろう。ベックは、「再帰的近代化」は、「リスク社会」がもたらす結果に、自己対決していくことを意味していると説明する (Beck et al. 1994=1997: 18)。このベックの警告から、私たちは、新しい社会モデルづくりに挑戦すべき時期を迎えていると考えなければいけない。それは、「再埋め込み」のない「個人化」が進展していくなかで、人びとを安定へと導く、集団化、あるいはネットワーク化をどのように進めていけばよいか、という難問に対して向き合っていくことになる。

## 4.2 相反する二つの社会

集団化、あるいはネットワーク化を進めていくうえで、まず取り組まなければいけないことがあるが、それは「個人の再構築」である。敷衍していえば、個人の価値観・倫理観を鍛え直すということである。

「疑似成長期」には、行き過ぎた「情報社会化」により、過剰な欲望が創出されリアリティ感の欠如した社会が生みだされたが、その社会を「リアル乖離社会」と名づける。ただ、「停滞（不安定）期」を迎えると、経済が停滞するなかで、将来の生活をどうするかという課題を人びとは突きつけられる。そうすると、浮かれて現実から乖離している場合ではなく、足元をしっかりとみて不安と闘っていかなければならず、現実の生活と密接して生きていく流れが強くなっていく。その流れを背景にして、集団やネットワークの形成が行われる場合には、二つの分かれ道があることを筆者は提示した (竹元 2021: 97-99)。一つは「リアル密接社会」につながる道で、もう一つは「リアル同調社会」へつながる道である。

「リアル密接社会」とは、現実の生活と密着して、他人との直接の交流のなかで、共生と歓喜の気持を分かち合う社会のことである。個人の権利や自由を尊重して、個人の意義や価値を認め、個人が確立す

ることを重視する、〈本来あるべき姿の個人主義〉の価値観を基盤にして構築される社会である。個人の意義や価値を認めるということは、自分だけでなく、他人の意義や存在価値も尊重するということである。

「リアル同調社会」とは、現実の生活との密接度が高まっていけばいくほど、周囲の動きに同調する動きが強くなり、人びとが主体性を失っていく社会のことである。〈行き過ぎた個人主義〉として「リアル乖離社会」ですっかり根づいた「利己主義（エゴイズム）」を基盤にして構築される社会のことである。その社会では、他人のことをいっさい顧みないで自分のことだけを考えて行動する価値観、他人なんかどうなっても良い、自分の身さえ守れば良いという価値観が醸成されるのである。

どちらの価値観を基盤において集団やネットワークが形成されていくかによって、二つの相反する社会が構築される。この事象は、「疑似成長期」に形成された「リアル乖離社会」とのつながりで見ると、つぎのようにも説明することができる。

「リアル乖離社会」で発生したさまざまな問題を、もっとも敏感に感じていたのは、一般の人びとであった。彼らはその問題性を深くかえりみて、このままの社会で良いのか、自分の生き方（自分史）を変えていかなくてはいけないのではないだろうか、という問題意識をもっていた。それが、「阪神・淡路大震災」をきっかけにして、一人ひとりのボランティア行動であったものが、集団化・ネットワーク化することによって社会に認知された。これは、まさしく「リスク社会」にみんなに対応するための再帰的な動きであると指摘できる。この再帰的な動きが、「リアル密接社会」への道筋を開いたのである。

一方で、「リアル乖離社会」でさまざまな問題を引き起こしてきた「利己主義」は、「リアル密接社会」の形成が始まることによってなくなってきたかという、決してそのようなことはない。逆に人びとの関心となる対象が“ヒト”に移ることにより<sup>③</sup>、陰湿化して根強くひろがってきた。「利己主義」は、現実の生活との関係が乖離していた状況から、密着した関係に移行するなかで、「リアル乖離社会」を「リアル同調社会」へと形を変容させて、しぶとく生き残りひろがってきたといえる。

当然のことながら、私たちは「リアル密接社会」への構築に取り組んでいかなければいけないのだが、それは個人の価値観のもち方にかかっている。すなわち、いかにして〈本来あるべき姿の個人主義〉を



身につけることができるか、まずは再帰的に自分を見つめ直すことから始めなければいけない。

#### 4.3 フロムの「積極的な自由」

〈本来あるべき姿の個人主義〉を身につけることの大切さについては、エーリッヒ・フロムとデイビッド・リースマンの主張からも読み取れる。

人類は、近代化によって個人の自由を獲得した。その自由は人類に「個性の誕生」と「孤独の苦しみ」をもたらしたと、フロムは述べる。「個性の誕生」だけであれば良かったのだが、ともなう「孤独の苦しみ（孤立感）」も味わうようになった。この苦しみからのがれて、新しい安定を獲得するためにどうすれば良いか、二つの方向性をフロムは提示する（Fromm 1941=1951）。

一つ目は、苦勞して手に入れた個人の自由を手放して、社会の風潮や所属する集団の意向に同調することを優先する。そのために、自分の個性や能力を発揮することを放棄して、依存と従属の道に進み安定を確保する。すなわち、「個性の誕生」を抑制することによって、「孤独の苦しみ」からのがれる方法をとるといえるのである。この方法は、「消極的な自由」への逃避であるといえることができる。自由ではあるが、自分というものを押さえて、自分を活かせる新しい帰属先をみつけないで周囲に合わせるといって意味で、消極的な状態である。そのような自由の状態へ逃避することによって、孤独（孤立）からのがれるのである。

二つ目は、受け身にならず自発的・自主的に行動することによって、自分の個性を確保するとともに、自分の能力を十分に活かされる帰属先をみいだす。そうすることにより、新しい世界と自分をむすびつけ、孤独を克服して安定を確保する。すなわち、「個性の誕生」を確保しながら、「孤独の苦しみ」も克服する方法をとるといえるのである。この方法は、「積極的な自由」の獲得であるといえることができる。

フロムが提示する二つの方向性は、結果的に両方とも「孤独の苦しみ」からのがれるのだが、個人を確立できるかどうか、ということでは大きな差がある。二つ目の方向性である「積極的な自由」を獲得することは簡単ではないため、実現するまではあきらめない強い気持が必要であり、困難をきわめるかもしれない。ただ、「モデルなき時代」に、新しいモデルづくりに挑戦するためには、二つ目の姿勢は大

事である。

#### 4.4 リースマンの「内部指向」

リースマンは、人口増減の推移から、時代を「高度成長潜在的」「過渡的成長」「初期的人口減退」の三つの段階に分けた。そして、それぞれの時代における人びとと、その人たちがつくりだす社会の類型を提示した（Riesman 1961=1964）。そのなかで、注目に値するのが、それぞれの時代の人びとの指向性を示したことである。この提示は、現代社会を読み解くうえで、大変示唆に富んだ内容になっている。その指向性は、三つの時代の順に「伝統指向」「内部指向」「他人指向」である。人びとの指向性は、「伝統指向」から「内部指向」をへて「他人指向」にいたるといって、歴史的な変化を論じたのである。

三つの指向性のなかで、これからの社会を読み解くうえで重要なのは、「内部指向」と「他人指向」である。戦後の日本でいうと、戦後から1970年代前半まで、人びとは「内部指向」の指向性をもっていたが、高度経済成長が終焉を迎えた1970年代の後半からは「他人指向」の傾向が徐々に強くなり、現在にいたっている。いま私たちは「他人指向に依存する社会」に、どっぷりと浸かっているのである（竹元 2021: 101）。

ただ、リースマンも指摘しているとおり、「他人指向」に依存している社会が決して悪いというわけではない。この社会の特徴は、他人の考えや行為に敏感になり、自分の方向づけは同じ時代の人たちによって決定されると考える人が多いことである。協調性は高いが自律性は低いといえるが、これは長い間「停滞（不安定）期」に身をおいている人びとが、現実的に対応してきた結果であるといえるのかもしれない。この期間、人びとは周囲の様子（空気）をくまなく傍受して読み取る“レーダー”をフルに稼働させて、日常生活を送ってきたのであるが、現実を生き抜いていくためには必要な方法なのかもしれない。

しかし、将来を見越して、現在の閉塞感を打破するために、「他人指向」に依存しているだけで良いのかという課題が残る。新しい社会モデルをつくっていく。そのために新しい道を切り開いていくためには、どういう人材が必要であろうか。個人の方向づけの起動力になるのは、他人ではなく、個人のなかに備えつけられた内的な価値観であるという人、すなわち「内部指向」の人びとが増えていくことが必

要である。

それは、個人の気持ちのもち方一つにかかっている。リースマンは、完全に内部指向型の人間、あるいは完全に他人指向型の人間というのは、実際上は存在しないことを指摘する (Riesman 1961=1964: 序文 x)。人びとは両方の指向性をもっているのだが、それが社会の変化やさまざまな体験により価値観が変わり、そのときに応じて「内部指向」の指向性が強くなったり、「他人指向」の指向性が強くなったりする。自分を見つめ直し、価値観を鍛え直すことにより、「他人指向」の人も「内部指向」の人になり得るのである。

“レーダー”を稼働させて足元だけをみるのではなく、“羅針盤”を稼働させて遠くをみすえ針路をみずから定め、進んでいく道を切り開いていくことが求められているのである。

#### 4.5 ベックの「設計事務所」とギデンズの「再帰的プロジェクト」

個人を確立することの大切さについては、フロムやリースマンのみならず、ベックとギデンズの主張からも読み取れる。

前述したとおり、ベックは、「再帰的近代化」は「リスク社会」がもたらす結果に、自己対決していくことを意味すると説明する。これは、「再埋め込み」のない「個人化」が進んでいく結果に、自分で立ち向かうことを説いているとも解釈できる。個人が何らかの集団に組み込まれることなく、社会にむきだしになっていく状況に、自分自身で対決する必要があることを、私たちに問いかけているのである。そのためにはどうすれば良いか、その方法について、ベックとギデンズは提案している。

ベックは、「個人化」した社会において、個々人は自分自身を「設計事務所」としてとらえなくてはならないと提案する (Beck 1986=1998: 267-8)。「設計事務所」とは、ユニークな表現だが、自分の人生は自分で設計することをイメージして、そのような表現を使っているのであろう。この「設計事務所」とは、自分自身を中心において、自分自身に行為の機会をあたえ、人生における選択を意味あるものに行えるような、積極的な日常行為のモデルのことを指す。個々人の運命は、自分自身が行った決定に大きく左右される社会になったため、積極的に動くことによって人生の行路を切り開いていくことを説くのである。

一方、ギデンズは、自分が何者であるか、自分が存在している意義はいったい何なのか、その問いに答えるためには、内省的に自分をかえりみて、他人に堂々と言えるように、自分史を作りかえていくしかないと主張する。まさしく、再帰的に自己を形成するということである。したがって、ギデンズは、現代社会で自己を形成するということは、自己の「再帰的プロジェクト」であると表現する (Giddens 1991=2005)。長い時間をかけて、私たちはこのプロジェクトに取り組まなくては行けない、ということになる。

ただ、これらのベックとギデンズの主張には不安が残る。「中間集団」からの「脱埋め込み」が進展して、何らかの集団に「再埋め込み」されることのない状況が、これからも続くとなると、個人は社会にむきだしになるので、ベックとギデンズがいうように、自律性の高い強固な自分をつくって生き残っていく必要がある。しかし、あまりにも、「自分、自分」と声高に叫ぶと、自己中心的な人びとが生みだされる危険性を感じるのである。これでは、「利己主義」を押さえるところか助長することにつながり、その結果「リアル同調社会」の形成がうながされるようでは本末転倒となる。

ベックとギデンズの主張が、〈本来あるべき姿の個人主義〉の形成につながり、「リアル密接社会」の構築を促す要因となるためには、「自分、自分」という個人の側面からだけでとらえてはいけない。彼らの主張が、どのようにすれば集団の構築に活かせるのか。集団のなかで人びとが一緒に活動しながら個人を確立するということはできるのか。集団の側面からもみていくことにより、それが防波堤になり、「利己主義」への暴走を止めてくれると考えられる。

## 5 集団化に向けて

### 5.1 「中間集団」との関係の再構築

フロム、リースマン、ベック、ギデンズの主張のなかから、「個人の再構築」に焦点を絞って見てきた。4人の主張からいろいろなことが読み取れるが、たとえばつぎのような考え方を導き出すことができるのではないだろうか。

社会は、人びとにその時代に適応できるような性格の形成をうながしてきた。ただ、その形成の方向性がいつも正しいとは限らない。当初は正しかった

としても、行き過ぎることにより間違った方向に進むこともありえる。フロムのケースだと、ヒットラーによるナチズムが進んだように。リースマンのケースだと、「他人指向」に依存しすぎる社会が構築されたように。ベック・ギデンズのケースだと、個人が社会にむきだしになりリスクを一人で背負わなくてはいけなくなったように。

そのような方向性に対峙するために、4人の学者は、「積極的な自由」（フロム）、「内部指向」（リースマン）、「設計事務所」（ベック）、「再帰的プロジェクト」（ギデンズ）という、それぞれの主張をもって、私たちに対処すべき方法を示しているのである。危機的なあるいは偏った状況におちいったときこそ、安易に周囲に流されることなく、自分の価値観を鍛えて自己の確立につとめ、社会や集団に向き合っていくことの大切さを教えてくれる。

彼らの教示を参考にして、私たちは、自分を振り返り個人の再構築に取り組まなくてはならない。具体的には、〈本来あるべき姿の個人主義〉を身につけることに取り組んでいくことになるが、それを前提にして、つぎは「リアル密接社会」を構築するためには、どのようにして集団化を進めていけば良いか、という段階に移っていくことが要請される。

この議論を進めていくためには、個人と集団との関係をみていく必要がある。人間は、社会とのかかわりなくしては存立しえない、きわめて社会的な生き物である。個人と社会との関係で注目すべきことは、その二つを結びつける「中間集団」の存在である。「単純な近代化」では、人びとは「中間集団」に所属することによって安定を確保したが、「再帰的近代化」に入ると、「中間集団」との関係が希薄になり人びとは不安定な状態におちいる。個人の再構築のつぎは、個人と「中間集団」との関係の再構築に取り組む必要がある。この論点は、〈本来あるべき姿の個人主義〉を身につけた人たちが、今度は安定した生活を構築するために、どうやって集団化・ネットワーク化を進めていけば良いか、ということ进行を考察するうえで重要になるのである。

## 5.2 集団の類型

一言で集団といってもいろいろな類型があり、多くの社会学者が集団の類型について提起しているが、そのなかから代表的なものを二つ取り上げる。まず、集団の類型について基底となる考え方を提示したが、フェルディナント・テンニースであるが、かれ

は「ゲマインシャフト」と「ゲゼルシャフト」という二つの類型を提示する（Tönnies [1887]1935=1957）。

社会を成り立たせるのは人間の意志であり、その意志には本来的・自然的に発する意志（本質意志）と、打算的・合理的に発する意志（選択意志）がある。本質意志の結合によってできる社会や集団が「ゲマインシャフト」であり、選択意志の結合によってできる社会や集団が「ゲゼルシャフト」である。「ゲマインシャフト」では、個々人はあらゆる分離にもかかわらず本質的に結合していて、親密な人間関係が維持されている温かい安定した社会である。「ゲゼルシャフト」では、どのような結合をしていても本質的には分離したままであり、相互に競争し合い対立し合う冷たい緊張した社会である。それゆえに、「ゲマインシャフト」は「共同社会」、「ゲゼルシャフト」は「利益社会」とも翻訳される。テンニースの主張で参考になるのは、この二つの類型を提示したことはもちろんであるが、社会が「ゲマインシャフト」から「ゲゼルシャフト」へ移行すると提唱したことである。社会の歴史的な発展を、二つの類型を使って明示するのである。

つぎは、ロバート・マッキーバーの主張を取り上げる。マッキーバーは、「コミュニティ」と「アソシエーション」という言葉を使って、二つの集団の類型を提示した（MacIver 1917=1975）。かれは人びとの関心に注目して、人間のいろいろな関心こそがすべての社会活動の源泉であり、その関心の変化が社会を進化させると唱える。人びとが、ある程度の共通の意識をもち、一定の地域で共同生活をしている集まりを「コミュニティ」と呼び、自然発生的な集まりであり、村落や都市などが該当する。そのコミュニティから、同じ関心をもった人びとが、ある目的を達成するために集まり、意図的に自発的につくりだす集団を「アソシエーション」と呼ぶ。この定義によれば、会社・組合・サークル・学校・町内会・NPOなど、現存する多くの「中間集団」が該当することになる。

マッキーバーは、「関心は増大しかつ分化する。そのなかには永遠のものもあり、また変化し消滅するものもある。さらに関心の強弱の変化にともない、関心が創り出す『アソシエーション』も変化する」（MacIver 1917=1975: 127）と述べるが、これまでの、そしてこれからの「中間集団」のあり方を読み解くのに参考になる主張である。



### 5.3 「個人主義」と「利己主義」の進展

人びとは、近代化により伝統的で封建的な制度から解放され、みずからの目的や利害にもとづく「中間集団」を、自由に結成することができるようになった。また、資本主義経済の浸透とともに、人びとは自分の目的や利害の達成に関心が強くなった。それにより、「アソシエーション」の性格をもった「中間集団」が多く生まれ、人びとは「コミュニティ」との関係よりも、「アソシエーション」との関係を強めて安定を確立していったといえる。

しかし、「再帰的近代化」を迎えると、「単純な近代化」で生まれた「中間集団」との帰属関係がゆらぎ、「中間集団」からの「脱埋め込み」が進展したことを述べてきた。この動きが進展した原因は、いったい何だったのだろうか。

その原因の一つとして、「単純な近代化」で生まれた「中間集団」が、経済の成長がとまることにより機能しなくなったことを第1章で述べたが、もう一つ大きな原因があると考えられる。結論を先取りしてしまうと、それは「個人主義」のたえまない進展である。本稿では「個人主義」を、「個人の権利や自由を尊重して個人の意義や価値を認め、個人が確立することを重視する立場」と定義した。人類は、産業革命や市民革命などを通じて個人の自由や権利を手に入れたが、いったん手に入れた「個性」というものを、簡単に手放すわけにはいかない。したがって、「個人主義」の考え方や価値観は、近代化が進むとともに浸透してきた。

この「個人主義」の浸透を後ろでうながしていたのが、資本主義経済の進展である。資本主義経済は市場社会を前提に成立している。そこでは自由競争が構造化されているので、この社会で勝ち残っていくためには自己強化につとめることが必要になる。ここに、個人の確立を重視する「個人主義」が進展する要因がある。ただ、自分の力だけでは厳しいので、集団に所属することによって生存競争に立ち向かうことになるが、このような人びとの必要に迫られた関心事が、多種多様な「アソシエーション」を生みだした。

そして、資本主義と共産主義との対立で生じた東西冷戦は資本主義が勝利を収めたが、それにより市場社会がさらに拡大する。この拡大は、グローバリゼーションでますます促進される。人びとの関心を、自由競争のなかで目的や利害を達成することに、さらに目を向けさせたが、それにより「個人主義」は

さらに進展する。このような経緯をたどり、「個人主義」は、近代社会の誕生から今日にいたるまで一貫して浸透してきたといえる。

「個人主義」の進展を受けて、「単純な近代化」では個人を基盤（単位）においた社会制度の設計が進み、福祉国家・会社・学校・近代家族などの制度や集団が新しく生まれ、個人が安定できる場を提供した。しかし、市場社会の進展は、良いことばかりではなかった。競争に勝ち抜くために、目的や利害の達成に関心が偏りすぎると、自分だけは勝ち残りたいたいという傾向が強くなり、「行き過ぎた個人主義」である「利己主義」が浸透した。本稿では、「利己主義」を「他人のことをいっさい顧みないで自分のことだけを考えて行動すること」と定義したが、この考え方や価値観は私たちの日常生活のすみずみまで入り込んできた。〈本来あるべき姿の個人主義〉の進展と表裏一体の関係を保ちながら、今日にいたるまで一貫して拡大している。まさしく、テニースが主張する、「ゲマインシャフト」から「ゲゼルシャフト」への移行が実証される。

このように「単純な近代」から「再帰的近代化」へ移行するにともない、さらに近代化（市場社会化）が進むと、同じように「個人主義」と「利己主義」もさらに進展したが、「単純な近代化」に生まれた「中間集団」はその進展に対応できず、「中間集団」としての機能を果たさなくなった。そして、「単純な近代化」で生まれた「中間集団」との帰属関係がゆらぎ「脱埋め込み」が進展したのである。

### 5.4 集団の「再帰的プロジェクト」

「個人主義」と「利己主義」のさらなる進展に順応できなくなった「中間集団」は、どのようにすれば立て直せるのであろうか。現状と比べて、さらに個人を基盤においた社会制度の設計に取り組む必要がある。しかも「利己主義」を押さえるやり方で、「中間集団」の再構築と新しい「中間集団」の創造に取り組むことが求められる。ギデンズの言葉を借りれば、この取り組みは、集団の「再帰的プロジェクト」である。なお、そこでは「利己主義」を基盤にして集団化が進むと、いま以上にさまざまな問題が発生する可能性があるため、〈本来あるべき姿の個人主義〉を基盤にして取り組まなくてはならない。

「個人主義」の流れが強くなっていくなかで、個人が「中間集団」に参加する目的とは、いったい何だろうか。ここで、ギデンズの主張を思い起こさなく

てはいけない。集団の活動を通して、自分史をつくりたい。あるいは、自分を変えて自己革新を遂げたい。そうすることによって、自分の存在する意義や居場所を確立したい。このようなきわめて個人的な理由が、主たる参加目的になる可能性が高い。したがって、自分が追求したいことを実現させてくれる集団でなければ、所属する意味や魅力を感じない傾向が強くなってきたといえるのではないだろうか。

ただ、集団というものは組織の秩序を保たなくてはならないため、そこでは個人が追求することよりも集団が追求することを優先する傾向がある。その傾向が強くなればなるほど、個々人は同質であることを求められる。「出る釘は打たれる」ではないが、異質であること（個性）は排除される。そのような状況において、人びとが安定を確保するためには、同質であることに従うしかない。しかし、これからの「中間集団」の構築においては、異質であることを許容しながら、集団の秩序を形成して最終的に集団の目的を達成できるような、難しいかじ取りが要請される。いわゆる、これまでの一般的な概念であった「同質的なコミュニティ・ビロッキング（所属すること）」から脱け出し、「異質的なコミュニティ・ビロッキング」（竹元 2014: 344）が実現する方法を模索しなければならない。それでは、どうすれば実現できるのであろうか。

仮に、いつやめてもいいよ、という集団があったとする。そういわれても、やめる人はいないし、逆に新しい参加者が増えているとしたら、どのような集団であろうか。それは、参加している個々人にとってメリットが生まれているなど、活動の効果がでている集団である。この効果が、今度は活動の継続や活性化の原因に組み込まれていき、継続者や新規加入者がさらに増えていく。このような好循環がつくれている集団は、成長もするし継続もする。この循環の関係は、下の「好循環の三角形」という図を使って説明できる。

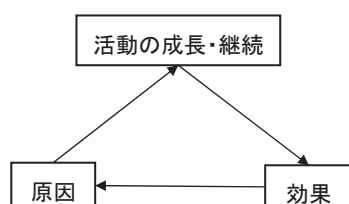


図1「好循環の三角形」

ただ問題なのは、集団活動を通じて、どうすれば参加者個々人にメリットが生まれるなどの効果をだせるかということである。そもそも個人が追求することと、集団が追求することは対立するものであるが、それを両立させなければならないのである。

まず、両立させるために大事なことは、繰り返しになるが、集団の構築の方向性が正しいか、ということである。同質になることを強制するのではなく、異質であることを許容し、〈本来あるべき姿の個人主義〉を基盤にして、集団の構築に取り組んでいるのか。しかし、これだけだと集団の秩序や目的を達成することはできない。

そこで、つぎに大事なことは、参加者が集団の活動を継続して体験することにより、当初はきわめて個人的な理由で参加していたのが、共同することの意味や価値を、自分を振り返りながら再帰的に理解できているかどうか、ということである。集団の目的を達成するためには、参加者個々人に役割を与えてとはいえないが、役割を果たすための共同活動を通じて、他人との相互関係のなかで参加者が自分史をつくりあげて、自己革新を遂げていく。そこでは新しい価値観との出会いもある。そうすることによって、自分の存在する意義や居場所を確立する。こういう過程を踏むことが大事なのである。

## 5.5 「中間集団」の社会教育機能

かれこれ約10年前になるが、自発的な地域活動がどのようにして成長するのか、そしてその要因は何か、ということを明らかにするために、宮崎県都市で毎年7月に行われている「おかげ祭り」を調査した（竹元 2014: 219-58）。この祭りは、「博多祇園山笠」など日本の伝統ある祭りを手本にして、1993年に立ちあがった祭りである。最初は20名ほどのメンバーで始動したが、2006年には参加者が600人までに成長する。

神輿を担ぐことを中核にした伝統的な行事を伝承していく活動だが、予想に反して若い人や子どもの参加者が増えていた。活動を続ける、やめるは参加者の自由である。集団の秩序を形成し集団の目的を達成するためには、伝統的なルールを順守するなどの厳格さが要請される。ヒップホップ系のダンスやよさこい系の祭りのような現代的な祭りであれば理解できるのであるが、このような伝統的な祭りにどうして現代の若い人や子どもの参加が増えているのか驚きであった。

何人かの参加者に、お祭りに参加した理由や活動が続いている理由などをインタビューしたが、そのなかで女子高校生（3年生）の発言がいまでも印象に残っている。その内容はつぎの通りである。

学校は、一緒に授業を受けて勉強する仲間の集まりである。そして、学習塾は、進路を決めて勉強することに目的を絞った人たちの集まりである。学習塾では、みんな、同じ目的を共有しているので、学校で勉強するよりは学習塾で勉強した方が心地よい。同じ目的をもっているところにいるのは居やすい。だからこそ、祭りは、みんなで作り上げていこうという、同じ気持ちをもった人たちが集まっているから居やすい。私の居場所ができてみたいに感じている。大学進学で故郷を離れるが、すぐに帰れるところがあるとも感じている。

彼女は、「学校」「学習塾」「祭り」の3つの「中間集団」を取り上げ、メンバーの同じ目的を共有する気持ちが強い集団ほど居やすいことを説明している。彼女は、小学4年生のころからこの祭りに参加しているが、インタビューしたときは「実行委員会」の最も若い実行委員で、園児や小学生に振り付けやマナーを指導していた。「実行委員会」は祭りの中心となるメンバーが実行委員となり、参加者全員を統率して祭りを成功に導いていく組織である。学校や学習塾は同年代の集団となるが、この祭りは10代から60代までと幅広い年代層の参加者で構成されている。そういった人たちとの共同作業により、事前の準備に取り組み、目的の達成感をみんなで分かち合うわけだが、彼女はこのような経験を積み重ねてきて、自己成長を遂げてきたことがうかがえる。

祭りというのは、役割体系を基本構造としてもつ地域活動である。すなわち、参加者一人ひとりに役割が与えられ、その役割を各人が達成することにより、祭り全体が成功するのであるが、このような共同活動のなかで人材が育っていくのである。

祭りは、社会教育機能が組み込まれた「中間集団」である。町単位で神輿や山車をだして全体の祭りが構成されている全国各地の伝統的な祭りをみると、多くの祭りに社会教育機能が組み込まれていることが確認できる。なぜなら、いまみたいに学校制度が整っていなかった時代は、地域社会で若い人や子どもを育てないと、その地域社会は滅びていったからである。その価値観や先人の知恵が、地域社会の重

要な知識として引き継がれているのである。地域社会を形成している全体のルールや価値観・倫理観を、地域社会の人たちが忘れていようであれば思い出させ、若い人や子どもにはその理解を深めさせる。そして、地域社会の絆が緩んでいけば締め直し、たががはずれているようであればはめ直す。このような教育の機会を年に1回与えられていたのが、祭りなのである。

いまや社会性に富んだ人材を育成するためには、学校の施設内のみで行う閉鎖的な学校教育だけでは限界があるため、地域社会の幅広い人たちとの共同活動のなかで行う社会活動と組み合わせて育成することが必要である。開放的な活動のなかでこそ、社会性は育つのである。

## 6 結語

テニースがいつているように、現代は「ゲマインシャフト」から「ゲゼルシャフト」に移行した社会かもしれない。いわゆる、「利己主義」が蔓延している社会に私たちは身をおいているのかもしれない。ただ、このような社会にも、「おかげ祭り」のような「ゲマインシャフト」の性格をもつ「中間集団」は存在する。そのような「中間集団」は、とくに若い人たちや子どもたちにとって、新しい価値観や倫理観を学ぶ場として存在するのである。そのような価値観や倫理観を日常生活で発揮することで、それまでなかったような効果を体験することがある。たとえば、友だちのなかでリーダーシップがとれるようになったなど。このような好循環が、自分史をつくっていく、自己革新を遂げる、という参加者個人が追求する目的を達成することにもつながっていくのである。

ここに、〈本来あるべき姿の個人主義〉が身につく土壌が育まれ、それが「リアル密接社会」の形成へとつながっていく。逆にいうと、〈行き過ぎた個人主義〉である「利己主義」が育つことをおさえ、「リアル同調社会」が拡大することをさまたげる。「利己主義」を押さえながら、個人が追求することと集団が追求することの両方が実現できる道が開けるのである。

ただ、忘れてはけないことは、フロム、リースマン、ベック、ギデンズが、順に「積極的な自由」、「内部指向」、「設計事務所」、「再帰的プロジェクト」という主張をもって示したとおり、出発点は個人の自



発的で自主的な行動にかかっている。各人が自分の価値観を鍛え直して、まずは〈本来あるべき姿の個人主義〉を身につけなければならない。安易に周囲に流されることなく、自己の確立に努めるとともに、他人の意義や存在価値を認める度量をもち合わせる必要がある。そのためにも、自分の奥深くに眠っている“羅針盤”をたたき起し、自分の進路を正しく設定し直して突き進むことが要請される。

## 注

- (1) 「ポストモダニズム」を象徴する一つの事例として、「産業社会」から「消費社会」への社会変容がある。「ポストモダニズム」が大事にする価値観として、商品の機能性（機能主義）から消費する意味への変容がある。そうすると、商品を作るうえで、消費者の需要や意向を組み込む作業が重要になり、生産者側から消費者側へ、すなわち「産業社会」から「消費社会」へという社会変容が説明される。「ポストモダニズム」の思潮によって、この「消費社会」の内実は明らかにされるのである。
- (2) ギデンズは、私たちの今日の世界を、高度化した近代社会という意味で、「ハイ・モダニティ」あるいは「後期モダニティ」と呼んでいる。これは、ベックがいう「再帰的近代化（第二の近代）」に相当する。
- (3) 筆者は、日本の戦後における人びとの主たる関心対象が、「高度成長期」は「モノ」であり、それが「疑似成長期」には“マネー”へと変容して、さらに「停滞（不安定）期」には“ヒト”へと変容したことを主張する（竹元 2021）。

## 引用文献

- Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main, Suhrkamp Verlag. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会——新しい近代への道』法政大学出版局.)
- , Anthony Giddens, and Scott Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Cambridge, Polity Press. (=1997, 松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化——近現代の社会秩序における政治、伝統、美的原理』而立書房.)
- Fromm, Erich, 1941, *Escape from Freedom*, New York, Reinhardt and Winston. (=1951, 日高六郎訳『自由からの逃走』東京創元社.)
- Giddens, Anthony, 1990, *The Consequences of Modernity*, Cambridge, Polity Press. (=1993, 松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か？——モダニティの帰結』而立書房.)
- , 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge, Polity Press. (=2005, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- 浜日出夫, 2007, 「相互行為と自己」長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志著『社会学』有斐閣, 47-74.
- 伊藤美登里, 2017, 『ウルリッヒ・ベックの社会理論——リスク社会を生きるということ』勁草書房.
- MacIver, Robert Morrison, 1917, *Community: A Sociological Study: Being an Attempt to Set Out the Nature and Fundamental Laws of Social Life*, 3rd ed., 1924, Macmillan and Co., Limited. (=1975, 中久郎・松本通晴監訳『コミュニティ』ミネルヴァ書房.)
- Riesman, David, 1961, *The Lonely Crowd: A study of the changing American character*, New Haven, Yale University Press. (=1964, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房.)
- 竹元秀樹, 2021, 「現代社会を読み解く——『リアル密接社会』の構築に向けて」『愛知学泉大学紀要』3(2): 89-102.
- , 2014, 『祭りと地方都市——都市コミュニティ論の再興』新曜社.
- Tönnies, Ferdinand, [1887]1935, *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, Buske. (=1957, 杉之原寿一訳『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』岩波書店.)

## 参考文献

- 『朝日新聞』「原発事故の正体」2011年5月13日朝刊.
- Baudrillard, Jean, 1970, *La Société de Consommation, Ses Mythes, Ses Structures*, Gallimard. (=1995, 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊國屋書店.)
- 現代位相研究所編, 2010, 『フシギなくらいに見えてくる！本当にわかる社会学』日本実業出版社.
- 長谷川公一・浜日出夫・藤村正之・町村敬志, 2007, 『社会学』有斐閣.
- 菊池美代志・江上渉編, 2008, 『改訂版 21世紀の都市社会学』学文社.
- 見田宗介, [1973]2008, 『まなざしの地獄——尽きなく生きることの社会学』河出書房新社.
- , 1996, 『現代社会の理論——情報化・消費化社会の現在と未来』岩波書店.
- 森岡清美・塩原勉・本間康平編, 1993, 『新社会学辞典』有斐閣.
- 中西真知子, 2007, 『再帰的近代社会——リフレキシブに変化するアイデンティティや感性、市場と公共性』ナカニシヤ出版.
- 日本社会学会理論応用事典刊行委員会編, 2017, 『社会学理論応用事典』丸善出版.
- 高橋秀寿, 1997, 『再帰化する近代——ドイツ現代史試論 市民社会・家族・階級・ネイション』国際書院.

(原稿受理年月日: 2021年1月7日)